



橫相新

正本選

後編傳



咄會六席日

新櫻嘯喬絅卷之二

因 蘭

八十一

下司比知恵

艸洞

八十二

算國自號

艸伯

八十三

系

碗

游

橙鳴

八十四

酸

桑

鷗山

八十五

濟

黎

詠

久

八十六

一久

殊入畫

年

秀得

八十七

東

東

連

曲連

八十八

東

東

連

秀夕



八十九 國取玉高 青奴

九十一 軸

一止

九十二

今東吉

泉齡

神樂

喜多

九十二

立

一止

九十三 天神

九十四 裕

一止

九十五 魁音利生

九十六 裕

一止

九十六 魁音利生

九十七 挑板

一止

九十七 竹包

九十八 竹包

一止

九十八 夜の露

九十九 竹包

一止

九十九 加奈川

九十九 潟内

一止

卷之三目録

下司の智惠

相本連が寄合てひよにけと恨むとつまへあじを
もので。きよよあんがうとうるすや。よ者て恨むを
かど達て。教多の恨みを入れあうれきがさを結ぶるの
がをあらぐれうふまれうとつよ。社入の者が
よよりを出ておじ首を出。どよを仕すがりも
あをのやがまく思東がま。先づ石を仕すがりも
あらんべども。能の付ふじや。カノ石をも
復古のまどき。白け。駆出でまどきもれぞ。春の色の

彼のうが腰こしごとく出で来るときも腰こし石いはをあ
の中なかへチヨイト引ひき込こで来くわる

喜田自榜

板いたを下さす。のしむとるたぐり金かなつよかんとくらへせう
きつよせちよゆて。櫻さくらひなまきを切きぼして坐すわて。櫻さくら
玉たまを切きぼる。まよけと女良めら氣けの切きぼ。おせふ
かあが。まくらすみのうらうが。又またはひそが。でも
おひそおひそ。一一正まっりおひそおひそ。どこでもどこでも拂はらう。ア切きぼで
二二うちもうちもこころこころでもでもおこそおこそ。スリヤスリヤア
ココう。ももう。金かな



しても一筋毛^{ヤウ}まよに十あと五十あへ筋の肉でも拂^ハが
てア五十あの毛あで九百丈^{ヤウ}をえも遠^カ。スリヤまで
家内^{カニ}がやあこき^{ハシ}かるものどや

茶碗湯

食事^{イフ}人中^{ミナ}、湯^{ヨウ}毛^マと筋^{ヤウ}二筋^ニ筋文^{セイモン}をらひ。まん人^ハ湯^{ヨウ}室^{ムロ}を
ひそへる後^{アヒテ}室^{ムロ}とひそよせり合^{ハシメ}て、まん人^ハ斯^カとく
行^{ハシメ}をせりあ。又^ハ半^{ハーフ}氣^{エア}すもせせとひ。筋^{ヤウ}は半^{ハーフ}筋^{ヤウ}のま
筋^{ヤウ}と又^ハ半^{ハーフ}筋^{ヤウ}とよろて、また^ハ筋^{ヤウ}とよろての湯^{ヨウ}室^{ムロ}
とひそへる。立^タキそれ^ハ湯^{ヨウ}室^{ムロ}とがよひ。ちをよ^ハテ^ハ立^タキ

まそまそぬれどづのよ海^シのに芦^{シロ}筋^{ヤウ}入^ル

西餐

又^ハまそまそぬれどづのよ海^シのに芦^{シロ}筋^{ヤウ}入^ル。
のよ^ハまそぬれどづのよ海^シのに芦^{シロ}筋^{ヤウ}入^ル。
まそまそぬれどづのよ海^シのに芦^{シロ}筋^{ヤウ}入^ル。
まそまそぬれどづのよ海^シのに芦^{シロ}筋^{ヤウ}入^ル。

西餐

まそまそぬれどづのよ海^シのに芦^{シロ}筋^{ヤウ}入^ル。

タタガ取又とそり上げてゐる。も詫
はれども、モ外見のほどの聲をつぶさに飛
らす。あつた近づきとねむせ合ひて、手のまへ
さんとよそぬるよふ。モ近づくとあんの織は
よ。追引拂。笑ふとあひなごと拂へば、あ
あはれて、笑ふものあり。立ちておもむと
経る事ある。今ノマテモ草木や小林の十人
割りもひみじ。全

一茶入盡へとゆ

生れ付てからを。むかぎ背のたうよあゆうよと
神のうけあがまゆ中よ童よめくほのぞみけ
度。食をそそ。後を斗。酒をそそ。られを食して
そのまゝ立身へ立。因えてもんせあぬだくきべし。
立ちを付と下とのびをせよ。前まの立よのびる
下と若たまよ。がとこもむうとかひのうが。され
て酒をあれど。死ゆの。まみの。ゆゑもよと。
麻^ス入食などあれ。がとて拂やとまよと。拂う
たすに。食あいと酒を及せば。あいやを吸うの

五の巻

とてとてと

あきてえせ

家内のみを、主所のまほりより。肉はとねます
船とテ、よどらきはるが、まよ入跡しまのめり。
とねくとねあせびよゆんと、コリヤおおき、表をま
あわせに、が、表をとて、床によ、ヨリヤヒ、経をまを
よどきをれて、よと、おとをなれだ。おとをひらく、とを
あらがの強がをくうせーーーーーーーーーーーーーーー
床入金わを跡よて、ロニ、ひがちよあ、もとや

にツホイねのじと、おおきよかと表の、とを叶け
ともく、おおきよかと表の、とを叶け
く、あらの、肉の、とを叶け、あられ、表の、とを
とよだす、とを叶け、とを叶け、とを叶け、とを
あとがう、とを叶け、とを叶け、とを叶け、とを
とを叶け、とを叶け、とを叶け、とを叶け、とを
とよだす、とを叶け、とを叶け、とを叶け、とを
とよだす、とを叶け、とを叶け、とを叶け、とを

そりかうれひ地

去西まをまよう。遙かの下郷を西とさうが。被
あら月々との悦びく。春來くるは村内のくれまたや
こゑの掃除など。西まや。されから。またぞがん
所廢(ホモダ)とやられ。被下鬼(ホモカ)よ。まけ
きと。且取用(ホモリ)て庄屋(ホシヨ)のあづをよ
ひあらがのほしてく。がよがわであをもとまつ
あらきり。肉糸(ホトリモロコシ)のそと。またぞ
ばんま(ホミ)と。まゆ(ホムラ)をさげて

ま義中(ミタチ)をうろたく少(ホリ)。せこよおうりとぞ下郷
ねづめれで。是ふくびづるよあても。たゞぞ
まぞめう。

園坂ふち鳥

角(ホトトギス)かどりをすよねー人(ホトトギス)が。歌(ホトトギス)み連(ホトトギス)そひにしが。
この男(ホトトギス)二ふ人(ホトトギス)。アレ六(ホトトギス)共(ホトトギス)未(ホトトギス)どり。鳥(ホトトギス)よ。大(ホトトギス)おね
じや。よふ角(ホトトギス)かどりよあつでも。ととめくを。安(ホトトギス)久(ホトトギス)と
ものとま。復(ホトトギス)をめいで行(ホトトギス)ま。

絶(ホトトギス)多(ホトトギス)え

に戸ノ細見の強男を見て、見て來るやうにて
居る男あり乍らと云ふに戸ノ細見の人の事。
アんとい戸をじてと云つて、ほりと已が聲
をりであらぐのとゞをあやどきをのちをかじ
ちうみと壯湯のそんすう。廻所。さうの所の
芝居。こきしゆ。又捨別あるのじや。またをで
玉手。ゆき。またも。さんさん。もとおろしておれ
サテ。よゑ。ひどくて玉き。サア。よゑへひひきをうる
ハテ。筋念あ立ての。済まさか。うみ三守て玉の。

大神ノ糸

中居二人連れて今持たらへ歩き。アミ
アミさん。のホドヤ。アレヤをはじめて。アミさん
ウ娘。うそトドヤ。アミの娘。アミの娘。アミの娘
をひいき通ふ。彼を代耳に入へや。おも美の娘
をひいきもチヤレくくくくくく

今 東吉

喜五將暴撃。左近に行。トウジヤ。おひびと。ハ
ナ、利州さん。お出サテ。きのあんとよふ三の

まくのほよひやううそてあちらへと食がくゆ
おり入らうにされどあまひよせうきとを後
我水が出て。シモタリニ毒立あげよあすとひ
フレモトドクモアドヤと向て。サアサのをじ
ひ。羽織ゑと細い男ではのこ

親せ音法利生

親ふ連の唄礼が京を凌ぐ大佛、寺、母、娘
居る。息ふねの穴をくじりが中宿にてつまう。無
奈をして宿を見ておこう。出せどもおゆまの



玉ゆふのあむ観せあるとおづと

裏りす)

玉ゆふ盗人ぬきびとが家尻切いえしりきりて送入うつりへまへ。内うちに板いたもひ
かくら。やをやをであくらうどぞ膳屋ぜんや。ば肉ばねうらもひ
かくもひしてかくらへまへ。あざうて被は。
登人のぼりもあるじて。どぞ見みはられぬやう。モウもよ
も。いやいやとも見て。アサアサ切きてふざふざして行ゆ。家いえ
あれを已いよくひゆ。盆中ひんちゆよ家尻切いえしりきりとづぶとづぶだ
あからあからとあれ。盜人ぬきびとよへ。イヤイヤすくわわをれ

道みちでひきゆふ。アタシアタシの家いえでがざるといひ。餘あま
そよひそよひを助たすけとくと。よくおそれおそれがく。意い
アキアキ。志しじせせ。盆中ひんちゆよ家尻切いえしりきりとづぶとづぶだ
内うち理りでねねもとづぶとづぶだ

身と身を

人氣ひとけ多多くはたてね。ききくくが泥なづ寒さむ。ハキハキすよ
男おとこと女めの全そんて。泥なづ寒さむを潤なめ。享うきここが料りょうはくはく。
八は集あつる。もと。まほまほ。食くて出だままれ。二人ふたりともまま食く
うち。西にし。隣となりのせりええと遠とおれて。ままうまうまうささが

ものとゞぎきしが入ーとおまへをぐりさゆるの傳にて。
親入ねうよひあがれはしと候がえいのあま
との事。毎例ちよふお移をでござりまんあと。され
て是熱あく。アイおどふをくべよ精を底せどく
喰べ四とら寝でも改づろが。知てへた爲一まわぬ例
の脛おーを。身とはもターチりとだねあつた
をこでもあうります。親にアイヤホニヒたの灯でありひ出で
たの灯で看さん。イヤホニヒたの灯であります。
寝よひ様をたくら。奥丸をたくら。アノ奥丸とよ

よのへ徳あるのじやとつひ。亭ミハイたれよおー
ほして。奥丸をくみ本主と見て。親に看よおー
ぞよ。軽くとほー。

何きう是

親又云がくるとくすのづ有ものう。サア出へくとい
モウト云がくる。此處へに云され。親のゆきな
ら双方とも云がる。親又ハイらゆきのあ
うちゆき。云うとも洋一まよ。候私でからと
うても済ます。ヨリヤヤイ泥坊か。宿を參

ゆゑもひよりて。うふすきして。あそびにげまを
おのきもひあきにげまを。身はつねじや寝老でもとづ。
乞食であるが。ばくらをすくすくあら。寝丈までとづある
このお敷がきぬ。うふ。アカゲマセ。身すくじるを.
親にや。おせあるそれまを。おのきりの様で。おさりまき。
アシキへおせりをまれます。おをせらを。たれむほ
一てらげませう

夜の宿

まさん寝がまく。せぬ起一。がまくままで。おぬ失

佛さんであさまをコワヘリ。おまかげあらもあアサ
て。あらとくんで。寝ねをヒツニヤリ。寝でもかとお
墨をあらぐらう。うわくとせと。がさんと寝ねや
くよ。度ひの

寝榜は參る

おの寝長。寐者をうひ。公のゆよと。寝ゆつとく
さを晴さんと。説くの名不因名を。おの寝のゆくを。毎日く
寝長のゆくも。おもく寝て。おを休。二連三西。お
頃れを。おきるよ。元すりを。玉田今九界。まとも。とく

天をかきをひれ あんまきごば ようそく まくや
余を歸すえせうあうへと 見ね難集へ いろくの名
つをかくべ ぬすす連中す まく參まむの後て まくのれ
凡セ日あよて 雨のひじかはくふ ひじかあや まく
よほどのまくのじて はなまくと まくとまく
人を稀す ぬすすて 署をよぐ てを ほひのひの
まくのじらのマニマト うの ほり うと まくひがく まく
かねよ日を ふくめがれだ おとくうと まくひがく まく
凡あうせば まくね松の中よ まくお出よ まく まく
かくや まくとも まく

まくとまくして まくすり大勢の人妻と まくの大隊
押立まくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
余を歸す中 まく連中す まくまく人夫を食て
かくや まくとも まく

加茂川

田舎娘京都を まくとまくまくしげ二月余きて 近石
移の山に生まて まくあめの山 まく合て まくまくの山で まく
ゆくと まくそら秋を まくと まく秋を まくまくは まく
ゆく湯を まくかまくが まくまくや まくして まく

立春

あまへ諸方の施正月は候あまくや言ぐも唱ふをくび
かやくとくよの候た寄金を候うけいんとがく今こそは禁裏きんり
の御膳ごぜんへ奉り皆ど云食を来下り禁裏きんりの御膳ごぜんそぞの
のまよりとも而ゆく幸さいりれば珍めずらるやとぞとく坐す
されど身の御膳ごぜんわざりば、と嘗なともはふく不無の
とほく家いえかあくあくをくをせりとと作つくせられが言
ひそくらのそくふ新しん系けいしやもの

新撰嶌喬経しんそんじょうきょうの寒さむ後ご

二年忘財角力

星本 寿山
根本下物撰

呪乞初席

全八冊

立春嘶大集

常華亭君竹
後素軒案庭

二席目

全五冊

夕涼新聲集

壹詩軒素徑

三席目

全五冊

頃々嘯歎立增舍大梁

四席目

全五冊

智友競唱拂筆若亭對青

五席目

全五冊

平撰寫役判

役者藝不定の例より空の役付を
定め甲乙を候む別是役席之

全八冊

時勢詰綱目

七席目

全五冊

時勢詰大全

稿書亭總

右同席

安永六年

西正月二日新板

斬清書會頭

高橋榮治軒

高橋榮治軒

佛書物語

法

川久藏

書肆

伏見在赤之間

伏見在赤之間

近野ちとせ山中

山田屋久兵衛

吉根彌卦作三日

元平左衛

もあぞ小波町角

元平左衛

心斎院久美町山入

元平左衛

京都古町色姫小波角

元平左衛

板木細工人

立場の居間や町入

板木屋傳左衛

天地のしき和を深め潤いに満たす
あくまでも嘴はあくま字添え納まぬ清
一休禪の叶も曾是れが書於と
むやく祖父母とて手取まゆ
穂が峰乃がてうちより流乞く
絶波は足引とれとれとれとれと
詠はれを候にしもまだ左近をひそ

卷之三
詩軒
素秋

卷之三

七

卷之三

卷之三

國學

寒頭酒
西宋
金井

第三

卷之三

卷之六

卷之二

ほんえ

之扇

第三回
金の匂

精之

第
二
回
出
の
み
ま
ぐ

栗本

第六
枝六
柳

卷之三

第八
通の
稿子

卷二

十九

媛待の最

キ

十曲

天蓋消

白桃

二十

田舎客

ニニシ

十一

不審絵

位々

十三

淳川竹

里木

十二

桶の月

管水

十四

鬼笑ひ

漏月

十三

妻室の約

菅水

十五

墨穀堂

■

十四

腰枕の約

菅水

十六

浮舟

■

十五

薄荷茶瓶

扇东

西 東

あまう自鳴らる者とほき立坂をかまより裏山
のやうに去母の山の終頂もあう自鳴がつよむじ
平松又ねつゝ京都を見むしてあすくやくす
けうちへ寄りよみどりのきづきとげあ友達
あへあとひあぢや サア支へ因へ今あめがきこへ
あきらあホウ それいじづ清流かよせてもうてづ
的智ぐあきこをあくぬうどやま云の見え遠ひよ
ゑくの石遠ひやと參ぐふつたかが遠ひてもうき

馬のくじら、けのうりや

皇室の御所

志下の息子をまきをぬきの聲をわが心の聲拂
そ療ヨリ治チし因ヨリ房ル母モト嫁マダラをまきをぬきが第
が遠ヨリあくまくあをアモウてまほマホりまくら
どもモモやまゆヤマユでテゆまゆユマユのよだの時ヒメと娘ムカシ
のうノウいイの

伏
猶



医者ありづらへよひは双毛の病院を今て今にとすり
かどるよきあまこのキモミをばくよほじるゆ
玄関毒の近系をアマガヒテのセ病院がまに
けるのうはけね家めの中よ小い様にてひ因病院
よゑ隣近たまもよ病モウトヒヤをあわざさき

抱持ふくえ

あくまぬよお車を下さはせうきもひと
の包よも外立を今よちゆをばわくたまくみ
南よあくまゆあくまゆのどうからサフクハシを

やうほくよよむもあああまんわまのなるあよも
よじう部屋でたまもとあよとあれづくあまの英
しんおがくらきよあがもあれなどもれもれを
そかれづも内よもよれづがくかのじよとく四
まさくヨ、ヨあものうこもくうおれよへがきと
てもおのこのたのタカモくびきうおもをまおを
崎うぶらすいイヤモキまよとじうもざれもま
じしてあををまくを

蚕の園

法はは士達中そりやうりおのきへまくらを
な因のきのざぶんにしてもきがいをもとめども
もやうじやつうそよみの市でなんにわあつじや
まきりくせきよまくら寝あよりのむすまひくら
すもそれおまえもくもくがりかまくもふ御であ
くべお月よいかまく

山の氣つくり

ちんぐり
まほの百姓大娘のむり方よ家の事も心も入シ
とてあんぞね程うげの心のわたくらかくのと云

タレをまたをせて彼百姓寢よハ吹の木とくあがざる
かくらふきえバサアく他そて食ふ國もとくばま
ぞしてくる何がよあまもと問が事きぬくぬ
新でもあもよ秋のなうや葉がとでざる

杖の折

斐やうばきよ町く東西とくこかくくびくと
かじめひとりのを食ふおのじとくこまかまく車
ひくコリヤハよれまくるひくことつてくとくと
あるコリヤまくア徒のどやかくもせぬのよ

通ひよ林ル字

寺の小僧こうそうを脇わき箱ばこを上げてあくと曰いふじが後あと
よりちどみの太おにしやありくまくまと裏さむをかしき
を脇わき箱ばこをかざつばかりねづかうちよまよまのりままを
ぢくれを小僧こうそうもうそくシテシテとおどもくす
まくこのがぢれせんせんあくあくかの箱ばこをゆくあくあくて筆ふ
ヤイわくらよひわんわんの脇わき箱ばこやこれ

樂らく絃げんの三段

上町じょうまちのををももああぐぐくるくるわらわわらわののよよ樂らく



かよてもふどどさまるわあんへゑなうゑのせよ
まよけよへやうきのとこしやるふがお師を湯まくらスセ
ざうじやうせうがーくまよあちよとあでねてたをハイ
あれえとこがみだまひよねうせうせうせうせ
お師を湯まよあくとあゆせうせうせうせうせ
トあくまんきくしもせうせうせうせうせうせ
まゆうあせあきれても面白あせうせうせうせ
あひよまて下そりまんああせうせうせうせ
えくせうせうせうせうせうせうせうせうせうせ

りあわへゑうぢやうぢやうぢやうぢやうぢやうぢ
ものあくまんきくしのもの

天蓋茜

寝よ一寺のおと人をうなづかひのきよあにによ
あくねどけじち後のもりへー夜よつるも幸をん
はーああのよおけあるひ巾フミンをあつをあして
五者ハナとくせうみ青橋カミコロよのぞきくるよ喜びの
後ハタケあるもよきあられづくよおおきれさ
サアあめうあれるるふくふくふくふくふくふく

あざらまーたまのまひはしてぢやはじまよこゑる
もあくまやあまなぞこゆんも益とつてのまきを
たのこのまをざふこのまを門にかへハイムをさん送り
すととすより先、ねむの灯のうはツハツねむと
てあまの端ハタケあそび、あざめのまがの中にあす
ぐんお宿トマツて猪シロよりぬきよゆうがづつあ
とかあはせぐとのおざつをきかるより一まのあ
たきよ駄タクしあをあくとヨウヨウあつがふぞくとつを
寄シムふよあすをよもんとすをされ

丙全客

去向魚カニあゆてもし害ミキをばあんあふ是浪花の
名あみりあくほきよそとあんどの宝葉モモイロ
紋モチとそろく地シロクとがれど古物アラモノの方カタの御臺
よ大函トトロをやけたの宮ニシノアヘあるをえ
きべ治臺カニの中よ金人のねでりとふ縷スレがのを遠く
骨スカルはだの月ツキと月ツキを波ハあたよとをえを
おとせじシがるをよげゲ何ナとよ入ハシことゑれ
ぞよれぐく繁モリのじり又枯カキ別人ヒトの故ハシへく

見ゆしめ

不 審 紙

あがくおまきぬよるよとそんほじこまきわな
ぐめくおきうおきくちひと強へりかであざりれ
ハテ松風者の女房よ繁昌あく育ちドヤ是ども
ウボアリテのいわぬすうあるとけやをせてもて先
生まつむるのいやあれをふ審がとよこひのたゆ
あらがなんでもうてんのいわぬうだあふへげかを法の
よせねよたのこせまんあくまきれあきをこせば

よきるこきしやあま人の鼻よたりよ

浮川竹

夜ゆのむと刻竹と出合珍がりて夜まきひだりと
あもきうぬ面ひがくぬまへナト喜のむすへなう竹
そよぎがともちゑへと古ひかひやれかくち
ても曲輪え町での夜の無見る竹がして喜ぶが
はサアはみがれこがまねをひくねひくねでもまきがま
きはあるこの竹ヨリやあまうをま葉ひまもまきと
曲輪え町の夜の無見るあるとてやくにれう

毎あるとすまへあれをすこひぞよ竹ハテ松四
かきぐそのみのをもる風ふもゆるてや

桶の月

旅旅の大ねの月をぬるべとね方のよやく
せんがもよが様どもしくやうをゑせんとりび
けの外でまりるが中すもと毛桶をねてみをもく
け桶の中よ月のうきうあるを刀にて月をそくいと
そひよ達のたるおめ作れしきほとみの月と
はゆも大病たきよ怪ア、よ桶くぐりあつと



卷之八

去る者ぞのまゝ執文をもあらむ
おきなまゆいあひでも御奉公をうへんと寧こわすふ御生
よもあれを被ふれまちくせ翁をぬりけ由もひと
鞠の毛皮をうるるふ身づるもあくもくも直也(は)あき
ぐすりをもがんとおひひるるよ木のきへほくたまうる
背よなきとキモアシス月もきて木の翁を刃(つ)て候よ

卷之三

思ひのどり

おまへ麻疹りますをされどもさうまやうあいやく
せうげあらゆあれども今づく冒をまきれませう
かのあそびがざりまん麻疹アーハとやうづまく
瘧瘧のあだとやうよやざりまやうある瘧をどや
かひとてあらわる瘧でざりまくああと人佗子よ
ふもまへあおこうもからへおさらじやど

禁の書

アノお人のち寧^{チニシナ}レヨはしあのち端の
裏^{シナ}やれとひるのせとよひひとと肉ひしくて
でかく出^{スル}。大氣^{ヒカ}の客^{ハモウ}お勝^{ハシマ}やゆよと
揚^{ハシマ}はせぬまきとそれおとたまのとちあひとをひきを
あをせばコレ^ハねが履^{ハシマ}ものであらやうびがりする
いやああこのやうなぞがりまひイヤ^ハねがらんと
に戸^ハあがでうのやうにがくまくとひだり裏^ハ
をかくすのせの流^{ハシマ}あそびあは小首^{ハシマ}がくわせ今^{ハシマ}笑^{ハシマ}
わらふとゆうともあうもくとく^{ハシマ}通^{ハシマ}てせしるのを

そにふうつと見る

妻宅のぬ

あ宅の戸^ハがく胸^{ハラ}うご^{ハラ}と背^{ハラ}を^{ハラ}ア、
用^ハをすひゆ^ハとたゞの用^ハから^ハアよ^ハと^ハア
よ^ハと^ハが本^ハやあるゆれイヤ^ハく^ハな^ハあ^ハめと
戸^ハをあ^ハま^ハり^ハ入^ハて^ハま^ハか^ハ一^ハ足^ハを^ハす
アハヤ^ハさんもきつり^ハやナアあ^ハづ^ハは^ハうの
ひこして是^ハもやは^ハをも^ハま^ハれ^ハつけあひ

ふを足

友達の三人才をもひるび夜に入られどりや
ゆうとすまへ正体もあく辭うけをあくと
きてあてもあとももくもめじゆせじく春の戸
をたたひ取れりとすま戸立も戸をあくを
どうくと内よ入は亭をもひ辞よゆまとひり
をすまが尼らを呵てあひとあひテアとあひと
いこと二人をよ揚かロヒとむせらよ戸戸やく
ふらのへんといすまイヤセテひ辭よやく是が若き
あキドヤ西おのひよシテあひと二つびのひじて

是ひよじやはよもておひが草やが里をわすれ
のひのくか戻おまえどもやまもあひとひよれんを
あひておひとひよれんあうニテアとやひとひよ
れんとひよれん出するゝものせよれんとひよれんと
ひよれんとひよれんをか戻大きよはらをえりかを
サアむじやくとがおまえ仕合あづやまくらを
イヤサおととハ我おが湯ゆをさがよアグひよれ
あん

鷺うけ茶瓶

ソリヤ洞爺のトガリモモジヨヤイミツナハ
モチシムキセアザグヘトホシタクガムヒシテハ
のトマウアハドコリシタマキムクドノギシムの
アヒキシテドヌムクドスケリレゾグヘアラシム
何てボクシムアンドエオのモケツモガタリヨホトモ眼
ガシルヒラシトモクシモお寄トアリキトヨマヨアラシ
ノノ都をレレ



咄々二席目夕涼巻を終

横相新

